

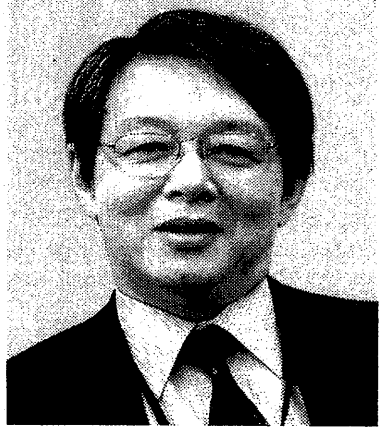
ここが聞きたい

建設コンサルタントとしては初めて老朽化対策に絞った保全エンジニアリング研究所を、今月1日付で設立した大日本コンサルタント。笠井利貴所長は、「保全にまじめに取り組んでいるところ」とほめて、「この答えの1つが研究所だ」と力を込める。「既設構造物の保全の基準をつくること」ができればいい。それが究極の目標」と話す笠井所長に、研究所設立の狙いや今後の展開などを聞いた。

設立の背景について、「保全は新設とまったく違つ分野で、技術体系が確立されていないため、きちっと確立したいという当社のポリシーがある」と説明する。研究所は、既設のコンクリート橋、鋼橋を対象とする。「ニーズがあれば広げる

老朽化対策で研究所を設立しましたね？

未知の損傷に保全基準



が、道路構造物だけで手一杯なため、まずは本業の分野に取り組む」。新設と保全がどう違うのかを理解してもらおう。新設の設計は、地質や測量の調査結果、現場の条件などが示されれば、極端なことさげと室内ですべてできる。保全は実際に現場に行き、どの程度壊れているのかという現状を把握しないうちは始まらないことには始まらない。壊れた原因の究明も重要で、そのほかにもさまざまな技術的対応が求められる。

大日本コンサルタント 保全エンジニアリング研究所 所長 笠井 利貴氏

「コンクリートが欠けらなかな、劣化によるものかによって対策が異なるし、放置しておいてよいのか、保全しなげればいけないのかの判断も必要となる。技術体系が新設と違い、技術の要だ」

「保全の分野は新設の技術では説明できないこととがたかさんある」。一も軽い荷重で設計した昔の橋が壊れないのはなぜか。かつて、コンクリートがひび割れて劣化するアルカリ骨材反応やコンクリート中の鉄筋がさびる塩害、金属の疲労による鋼材の断裂などが話題となった。が、「特定の大学や先生が、特定の問題が出た当初は、未知の損傷だった。その後またどが、自由

不測の事態は研究所が対応

「一いつした問題が出た当初は、未知の損傷だった。その後またどが、自由

に「なるためだ。個別の案件では、必要に応じて国、大学、民間と契約を結ぶ」。研究所の設置は、7月から2009年6月期に入るため、会社全体の人事異動、組織改革が予想されている。所長を含め常勤6人でスタートしたが、7月には拡充する見通しだ。「支社の技術スタッフを非常勤で入れる。その際、受注した保全関係の業務を持ってきてもらい、効果も大きい」。

（かどい・としき）
1977年3月新潟大工学部土木工学科卒業、同年4月大日本コンサルタント入社。おもに橋梁設計・点検調査に従事、2008年4月から保全エンジニアリング研究所長。

「橋梁点検ハンドブック（道路保全技術センター）を共著。三重県出身、53歳。」